

2022 6 1

市民の意見 NO.191 より

特集 「ウクライナ戦争を考える」

ウクライナの戦争に思うこと

海老坂 武

いまこの原稿を書いている瞬間にもウクライナでは人が死んでいく。都市のいくつかは壊滅状態になっている。誰の仕業か。

もちろんプーチンである。新聞もテレビに出てくる「専門家」もプーチンの横暴、野心、狂信を語る。そのとおり。

だがそれだけか。責任の一端はいまなお「徹底抗戦」を説くゼレンスキーにもあるのではないのか。

4月24日のNHKはそのゼレンスキーを英雄に仕立て上げた番組を流した。国外亡命は拒否し「国民と一丸となって最後まで戦う」と語る「勇気」を称えている。しかし、「国民」を戦わせているのは大統領ではないのか。「徹底抗戦」を叫ぶたびに、ウクライナの兵士、市民が何人も何百人も死んでいくという現実を、彼はどのように考えているのか。どのように感じているのか。

ウクライナの兵士なり市民なりが「国を守る」としてみずからの意思で銃を取ることは、「お国のため」に死ぬことの愚かさがかつての戦争をとおして感じとっている私から見ると愚かだとは思いますが、批判するつもりはない。しかし、自分は安全地帯に身を置きながら、戦えと命ずる政治指導者には吐き気を覚える。

彼はロシア国民に向かって、戦争を続けると「あなた方の兵士が死ぬ」と呼びかけている。では、「抵抗」を続けることで、ウクライナの兵士は、市民は死なないのか。

3月末の停戦交渉の時期に「停戦が実現しなければ第三次世界大戦になる」と発言しているゼレンスキー、4月16日、ロシア軍のマリウポリ包囲にかんして、「われわれの軍部隊が全滅させられた場合、ロシアとの交渉は全て終わる」と主張するゼレンスキー、こういう狂信的指導者に武器を供与する欧米の指導者をどう考えるか。

「さあ、武器をやるからお前ら抵抗して戦え」ということではないか。送り込んだ武器の効力が検証できる、ロシア軍の実力が測定できる、うまくいけばロシア軍の戦力を弱体化できると、さらには兵器ビジネスのチャンスだと目論んでいるのかもしれないが、それは戦争を長期化させるだけで、これらはすべて、ロシア兵の犠牲はさておき、ウクライナの兵士と市民の犠牲の上に成り立つものだ。

正義の味方面したそのような欧米の指導者の卑劣なやりかたに私たちは同調してよいのか。

ロシア軍の暴行、残虐行為、もちろん非難すべきである。しかし、それはロシア兵だからではない。人間を残虐にするのは戦争である。そのことの例は、日中戦争時の日本軍の残虐さ、アルジェリア戦争時のフランス軍の残虐さ、ヴェトナム戦争時のアメリカ軍の残虐さ、枚挙にいとまがない。

戦争自体が犯罪であるということを棚にあげた「戦争犯罪」の調査なるものは滑稽でさえある。

新聞はロシア市民の戦争反対の声、また命令のままに戦場に駆り出された兵士の「やりたくない」という本音を伝えている。

しかし、ウクライナ兵やウクライナ市民の「やりたくない」の声が聞こえてこないのはどうしてか。

90%以上がゼレンスキーを支持しているとのことだが、仮にこの数字が正しいとしても10%が彼に背を向けるとするなら、ジャーナリストはどうしてその声をなんとかして聞き届け、伝えようとししないのか。私たちが耳を傾けるべきはこうした声ではないのか。

新聞・テレビに登場するロシア政治・歴史学者、あるいは政府関係の軍事専門家、彼らから発されてくるのは、プーチンの権力構造の分析だったり、彼の病気の推測だったり、この戦争どちらが勝つかの予測だったり、国際政治の戦略だったり、そんな言葉ばかりだ。

大事なのは、それぞれがロシア国民の立場に立って、またウクライナ国民の立場に立って考えてみることはないのか。ロシア国民だったならばどうするか。プーチンのこの戦争に反対だ、ではウクライナ国民だったらどうするか、と。総動員令を出して成人男子の国外出国は禁止、戦うことを強いる大統領を支持するのか。

ウクライナの戦争が教えることは、「国を守る」という言葉の無意味さ、悲惨さである。何を、誰を守るというのか。人命が失われ、都市が破壊され、何百万の人間が国を去らざるを得なくなっている。ゼレンスキーが守っているのは政権の座だけではないのか。

情けないのは護憲派らしき論客である。

藤原帰一は第二次大戦でのナチスとの戦いを例にあげ、「リアリティー」なる不透明な言葉を持ち出して「降伏すべき」説を退け、他方で日本国憲法の前文を持ち出しその「国際主義」を現実主義だとして辻褄を合わせているだけ（朝日4月2日朝刊）。

長谷部恭男はゼレンスキーの「徹底抗戦」は「憲法原理」を守るためだとして讃え、われわれが守るべきものを「現在の憲法原理」だとしている（朝日4月30日朝刊）。

まるでかつて神格化された「国体」のようで、「憲法原理」のためには人が何万人死んでもよいらしい。他方5月3日の朝日朝刊の社説や江藤祥平談話のように、憲法の平和主義を唱えるだけでは現状について何も言っていないに等しい。

私が読み得て納得したのは、ウクライナの主要都市は「無防備都市宣言」をすべきだったと語る小西誠の発言だけだった（週間金曜日5月6日）。

ただ、もう遅すぎる。

この戦争がどのように終わるかは予想できないが、いまとなっては悪夢のようなシナリオだけが脳裏をよぎる。諸都市を破壊しつくしたプーチンの勝利宣言。ロシア軍が撤退したあとゼレンスキーが世界史の英雄として祭り上げられる光景。停戦協定を結ぶ二人の大統領がにっこり笑っている姿。どのシナリオもおぞましい。何万、何十万の兵士や市民を殺そうが、殺させようが、「愛国心」を動員して戦わせた戦争指導者だけは生き延びていく。

私は大東亜戦争が勃発した年に国民学校に入り、「愛国心」を徹底的に叩き込まれ、「お国のために戦った、兵隊さんよありがとう」と歌った世代の一人である。

戦後発見したことは、この「愛国心」という言葉の愚劣さ、瞞着である。そしてあの満州事変から大東亜戦争に至るまで、「愛国心」を説いた何十人かの閣僚の中で、誰一人、戦争で死んだ人間がいないということである。

誰かのために戦うことがあっても、「お国」のためにだけは絶対に戦うまい、そう心に思いながら生きてきた者としてこの文章を書いている（5月13日）。

（えびさか・たけし／フランス文学者）